

「大腸疾患——その診かたと対策」

松 永 藤 雄 編 弘前大学名誉教授・東京都立駒込病院院長

北里大学教授

岡 部 治 弥

本書は松永名誉教授が弘前大学における現職時代の昭和25年頃から、その後約四分の一世紀にわたり、当時本邦においては関心の薄かった大腸疾患に焦点をあわせ、教室をあげてコツコツと進めて来た臨床研究を中心としてまとめ大腸に関する最新の知識を盛った総合的な一書である。

たとえば当時本邦においては稀であるとして興味を全くひかれていなかった潰瘍性大腸炎の研究もその1つであるが、本症は現在難病特定疾患の1つとして本邦でも広く研究されるにいたっている。また現在大腸疾患の診断に不可欠であり広く世界で使用され初めている Colonofiberscope も、その開発は松永教室において Sigmoidoscope の研究にひきつづいて行なわれたものであり、現

在ほぼ完成を見ているその診断技術の確立も、この教室において熱心に研究された成果であることは、またよく知られているところである。

いわば本書は松永教授以下多くの門下生の永年の研究の結晶として生れ出たものである。その研究の歴史は松永教授の恩師である黒川利雄先生の序や、編者の自序に くわしいが、本邦におけるパイオニアとしての研究の経過が、門下生に対する思い出とともに記されており、その内容は年毎の消化器関係学会でそれらの研究成果をあるいは各箇演題で、あるいは特別講演で見聞して来た者として感慨深いものがある。今更ながら本邦における大腸臨床研究の発展に松永一門のあゆみが如何に大きく貢献しているかを知らされるおもいである。

本書の内容は大きく総論と各論にわけられ、総論には大腸の機能、大腸疾患の重要症状、大腸疾患の診断法、および治療概論と4章に、各論は潰瘍性大腸炎、大腸癌、大腸ポリープおよびポリポージス、過敏性大腸炎、大腸憩室、その他の6章にわけられているが総論は豊富に文献を参照して、わかりやすく述べてあり、とくに内視鏡診断法では自らの手で苦労しつつ開拓して来た技術とその診断学の解説であり迫力がある。各論は永年にわたる豊富な症例を示し、大腸疾患に関して殆どあますところがない。

松永門下で今やその道の熟達者、第一人者として知られる12名の方々が力一杯腕をふるって書かれたという感をしみじみと持たせる良書である。

本邦において大腸に関するこのような総合的な著書は類書を見ないといってもよく、消化器に興味をもつ学生や、臨床医家は勿論、消化器専門医も座右に備うべき一書としておすすめする。

B 5 / 頁500/1977/¥16,000
<南江堂刊>